

中村学園大

平松園江

中村学園短大

佐々木シナ子

○野間恵子

目的 前回までの小試片の実験では、LASは尿素除去には効果がなく、振盪洗いと洗濯機洗いとは後者の効果が大きであった。洗濯機による水洗いでは微量汚れが残った。

今回は実験温度20℃とし、実物大のおむつを使い尿吸収量を変化させて洗い、付着汚れ量と洗浄後の残留量との関係、清浄布への移染等、汚れ除去に関する要因を検討したいと思った。

方法 おむつ1・2枚を四ツ折りとした上・下・(中)に試料を置き尿の代わりに標準量の水を滴下し、1~30分迄の水分の移動による排尿後のレタとおりを調べた。尿の検査線測定は前報と同様にし、汚れを有効塩素消費量測定によって判定した。

洗濯は温度20℃、汚染布、清浄布をつけたおむつと補助布を加えた重量の30倍浴比とし、洗濯機H社、PS-250M型を用いた。予めおむつに縫いつけた清浄試験布を使って手浸し、洗濯す、ぎした後、はずした布の処理過程での汚れを有効塩素消費量で調べた。

汚染布の汚染量を変化させ手浸後、洗濯後の残留汚れと清浄布の移染などを調べた。

結果 おむつ布50gに標準量17.5cc、100gに35cc滴下した場合、下部の汚れが多く、滴下直後は差が大きく徐々にその差はちぢる。含尿率は上が60%で下が80%強である。

清浄布の洗浄中の取扱い過程での汚れは、注意深く処理したものは、有効塩素消費はない。水洗いによる汚染布からの清浄布への移染は、手浸の場合が多い。洗濯す、ぎ後も、汚れはいずれにも極く微量残る傾向がある。1回す、ぎでは、汚染布洗浄と清浄布が移染した布とでは、汚れに差があり移染布の汚れが少ない。